

大川清孝，清水誠治（編）
中村志郎，井谷智尚，青木哲哉（編集協力）

感染性腸炎 A to Z

松井敏幸

（福岡大学筑紫病院消化器科）

『感染性腸炎 A to Z』は，大川清孝先生，清水誠治先生の編集による感染性腸炎のすべてを取り上げた著作である。両先生は，数多くの腸疾患を長年にわたり診療し，その中の問題症例を大阪の研究会で取り上げ，取りまとめた。関西の議論好きの風土は研究会にも持ち込まれ，ときに議論があまりに長く，紛糾することがある。しかし，饒舌に知識を競い疑問をぶつけ合うも，意外と討論者同士は仲が良い。そうした風土を受け継いで，本書は長年の構想と多数例の症例検討の重厚な積み重ねの結果，生まれたものである。多くの著者が苦勞して得た珠玉の症例を，新たに設けた定期的な検討会に持ち寄り編集したものである。

本書は，感染性腸炎のすべてを，内視鏡所見を中心に据えてまとめたものである。考えてみると，感染性腸炎に関する多くの記載はすでに論文報告として成立しているはずである。しかし，それらの報

告を参照しても感染性腸炎の内視鏡診断は variation が多いためか，どうも記載が不十分との印象があった。例えば，疾患範疇は異なるが，潰瘍性大腸炎の内視鏡分類に関する記載は直達鏡の時代に作成されたもので，今見ても記載が曖昧かつ不正確である。現代の高画素内視鏡には即さないものが多いのであるが，これを修正することは大変難しい。同様に，感染性腸炎に関する内視鏡診断も内視鏡機器あるいは挿入法の進歩に伴い改善されることが望ましい。そうした必要性に応じて生まれたのが本書であろう。

本書の特徴は，①大阪の討論を重んじる風土，②美麗な内視鏡と病態の把握，③多くの執筆協力者の分担作業，そして④何かを見出してやろうとする目的意識，であろう。こうした豊潤な風土が，初学者から熟達した内視鏡医まで広い問題意識を説き起こすことになる。そうした試みが基本にあるた

め，本書は説得力がある。さらに，慎重に構成された章あるいは内視鏡所見が持つ意義と鑑別能力など明快さと限界を丁寧に説明してくれる。おそらくは，本書の内容は初学者には少し難しい面もあるかもしれない。しかし，先輩がすでに経験した教育的な症例を用いてうまく解説されているので説明はわかりやすい。そして，症例に当たるときに本書を参考にして復習していただくと，本書がかなりわかりやすく構成されていることが理解されるはずである。

本書の帯に書かれているように，本書の先にはさらなる流れがある。帯には，“炎症性腸疾患との内視鏡的な鑑別が主眼にある”と書かれている。本書の最終章である「潰瘍性大腸炎に合併した感染性腸炎」の章は，そうした目的にかなり優れている。長年，苦勞されてきた，これまでの経験の積み重ねがよく表われている。今後は，IBSに近い病態を有する疾患の内視鏡診断など，さらにわかりにくい腸炎の解析にこの編著者がともに進まれんことを期待する。評者としては，本書のアイデアに先を越されたとの印象を素直に認めたい。

●B5/頁 196/2008 年/定価 7,875 円
（税 5%込）
[ISBN978-4-260-00491-6]
医学書院 刊